



そろそろ、梅雨も明けようとしています。毎年やってくる季節ですが、昔のそれとは様子がだいぶ変わってきています。地域によって雨の降る量が極端に異なったり、夏日のような日が何度も現れたり、以前の梅雨のパターンとは大分違っていています。四季の変化に対応できる身体をもっている日本人でも身体に変調をきたす人が増えるのではないのでしょうか？

カルガモ親子への謝罪

・・・プロローグ・・・

筆者の実家の裏には、高麗川という荒川の支流の一つが流れています。数年前までは、川岸には砂や小石で覆われた、清流らしい川原が延びていました。それが4、5年前より、葦の川原に一変してしまいました。要因としては、上流の住宅地の増加による川の栄養化や水量の減少なのでしょうが、さらには気温の上昇やCO2の増加（炭酸同化作用の活発化）等も考えられるかも知れません。

以前から、散歩するたびに、あまりにひどいので、いつか一掃してやろうと考えていました。しかし実行に移すとすると、葦の背丈も高いものでは2メートルを越すものもあり、草刈機を使っても辛い作業になることが予想されました。従って、その実行も先延ばしになっていました。しかし梅雨明け前に刈らないと、梅雨明け間近にやってくる大雨による洪水で刈り終わった草を一掃してもらうことができなくなります。仕方なく先週土曜日に重い腰を上げ「葦の藪掃討作戦」を開始しました。

ところが、刈り始めると思いのほかスムーズにはいきません。刈った瞬間に2メートルほどの葦が倒れ込んできます。束になって草刈機の上に倒れ込んでくるので、草刈機をコントロールするのに苦労します。そしてなにより想定外だったのは、この葦の藪が蚊や雑

多な羽を持った小さな虫達の巣窟だったことです。一刈りするたびに、蚊やこれら虫たちが数十匹と飛び出し、私の顔や耳など露出している部分を容赦なく攻撃してきます。すぐに、この戦いを長く続けることは不可能だと悟りました。風は無く、湿度は高いし、夏の太陽は容赦なく照りつけてくる。圧倒的な敵の数と、この環境下でこの作戦を続けることは、こちらの玉砕？を意味すると思いました。しかし何も成果を挙げないで引き下がってしまうと、当初の志？を傷つけてしまう。とにかく2時間かけて川原の三分の一ほどの葦を刈り上げ、後日に期して撤退しました。

・・・カルガモ親子・・・

夕方、いつものようにジョキングをするために川沿いの道を走り出した時、ふと、葦を刈り取った川原に目をやると、何やら動めくものがあります。既に7時を回っていましたが、夏の夕暮れは遅く、それがカルガモの親子であることがわかりました。母親1羽に子が5匹。周囲に注意を払いながら水に首を突っ込み餌をとっている母親の周りを、着かず離れず5匹の子ガモが無邪気に遊んでいます。彼等の何ともかわいらしい行動に見惚れていましたが、暫らくして私はとんでもないことをしてしまったことに気がつきました。先ほどまで私がしていたことは、彼らの安全な居住地を殲滅する行為だったことに気がついたのです。数年前まであった砂や小石の見える美しい川原に戻したいとの気持ちで、一発奮起し「葦の藪掃討作戦」を開始したのですが、4、5年の歳月で出来上がった葦の藪には、既に新たな生き物たちの生活圏が出来上がっていたのです。2メートルを越す葦の藪は彼等生き物にとって、外敵から身を守るには理想的な空間だったのです。カルガモの親にとっては、子育てをするにはこれとない場所に違いありません。その数時間前に、川の上空高くを鷹が旋回していたことなどを思い出していました。

・・・エピローグ・・・

幸いにして、カルガモ達が居住していると思われる場所までは葦を刈り込んでいないようでした。

私達は自然保護や環境保全を考え実行するとき、程度の差こそあれ、同じようなことを犯してはいないでしょうか。時間とともに環境は変わっていく。もとの環境が理想的だとしても、変化の過程で出来上がっている新たな秩序もあるということ認識する必要もあるのでしょうか。そのようなことに思いをよせず、あるべき姿のみを追い求める行動は、第二の破壊を招く危険もあります。視点を変えて物事の事象を捉えてみるという必要性がここにあるのでしょうか。